

目的；前編と同様である。

方法；前編と同様である。

結果；(3)住生活の評価；現在の住まいに対して、男女共8割以上が肯定的評価をしている。特に、1室または2室で様々な住生活を展開している、1室多機能型生活についても性別に関わらず、肯定的評価が7割を占める。しかし、否定的評価もみられ、その理由として、男子は「片づけにくい」「けじめがつきにくい」、女子は「1室で様々なことをするので不便」をあげている。次に、現状をふまえた上での希望を尋ねると「現状に加えてあと1室欲しい」とする層が男女共5割程度を占める。また「1室でよいから、もう少し広ければよい」とする層もみられ、現状に一応満足しているが、できればもう少し居住状態を改善したいと考えていることが伺える。(4)住居観；同じ面積ならば「部屋数は少なくても1室が広い方がよい」と考える層は、男女共ほぼ6割であり、逆に「1室の規模は小さくても部屋数が多い方がよい」とする層は3~4割存在している。(5)結論；ひとり暮らしをしている若年層の住生活の実態及び意識の特性は以下の通りである。①性別を問わず、居住水準はほぼ同様である。しかし、1室で行なう住生活行為には性差が認められ、女子は現状のような限定された居住空間にあっても、一般家庭内の多くの住生活機能を持ち込んだ生活を展開する傾向が強い。②若年層は1室多機能型の現住生活に一応肯定的であるが、広さ水準への要求は強い。③居室の構成パターンの希望は、いわゆるワンルーム志向層と、部屋数重視層に分離しているとみられる。